9月

美園小だより

令和６年8月 28日
さいたま市立美園小学校
第168号 児童数 1064名
Tel 048(812)6611
Fax 048(878)6660

杉原ビザ、命のバトンをつなぐ

校　長　　河 野　秀 樹

私は夏休みに福井県に行き、ようやく 47 都道府県すべてを訪ねることができました。この旅でぜひ見学したかったのが、敦賀の「人道の港　敦賀ムゼウム」です。なぜなら、今から７年前、岐阜県八百津町の杉原千畝（すぎはらちうね）記念館に行き、杉原氏の生き方を学んだからです。

杉原氏は、第二次世界大戦中の 1940 年にリトアニアのカウナス日本領事館領事代理として、ナチス・ドイツの迫害を受けていたユダヤ人に 2,139 通の日本の通過ビザ（命のビザ）を発給しました。当時日本政府は、発給要件に満たない場合のビザ発給を認めていなかったので、悩み苦しんだ末での決断でした。記念館には、杉原氏直筆の名前や日付、滞在期間などが書かれたビザがありました。また、杉原氏が生前に受けたインタビューで、命のビザの発給を決断した状況や当時の思いを語っていました。杉原ビザによって日本に渡ったユダヤ人や、その子孫から贈られたお礼のメッセージも掲示されていました。

今回見学した「敦賀ムゼウム」は、ウラジオストクからの船が到着した日本で唯一の港、敦賀にあります。当時、みすぼらしい身なりで疲れ切った表情をしていたユダヤ人に、お風呂を無料開放した銭湯の人や、リンゴを配り歩いた少年の話などが紹介されていました。どちらも、日本人の思いやりのある温かい国民性を表すエピソードだと思いました。

二つの施設で共通していたのは、今まで知らなかった人物の名前を見たことです。ウラジオストク日本総領事代理の根井三郎（ねいさぶろう）は、外務大臣から杉原ビザを持っているユダヤ難民を受け入れないようにという命令に対して「在外公館が発給したビザには日本の威信がかかっている」として乗船を制限しないばかりか、日本通過ビザを持たないユダヤ人にも渡航証明書を発行し乗船させました。ジャパン・ツーリスト・ビューロー（現ＪＴＢ）の大迫辰雄（おおさこたつお）は、ウラジオストクと敦賀を往復する船上で、ユダヤ教会から預かったお金を難民一人一人に渡しました。ユダヤ人の名前が複雑であり、多くが船酔いをしていたため、膨大なリストと照らし合わせながらの作業は困難を極めたと言います。小辻節三（こつじせつぞう）は、ビザがなく敦賀で入国できず「船上の難民」となった 72 名を入国できるように働きかけました。また、10 日間しかない滞在期間で行き先が決まらない難民にビザの延長を得ることに努め、それにより多くの難民が日本から目的地へ発つことができました。リトアニアで杉原氏が決断した約６千人のユダヤ人難民の救済のバトンは、ウラジオストクで根井氏が引き継ぎ、大迫氏の尽力を経て、日本で小辻氏が受け取りました。この命のバトンがつながったことにより、その後数万人以上の新しい命が生まれました。

私は、困難な状況の中にあっても命のバトンをつないだ日本人の行為を誇りに思います。２学期が始まると、６年生は道徳で杉原氏の業績を学びます。他学年の児童も、学校図書館等を利用して伝記を読むことで、様々な先人の生き方を学んでほしいです。

【参考】『命のビザ、遥かなる旅路　杉原千畝を陰で支えた日本人たち』（北出明　交通新聞社新書）等